

三人の「視点」 加古 陽

「作歌について、あるいは短歌一般について、意見や考えを自由に述べてもらおうページである。短歌について考えるヒントにしてほしい」

二〇二〇年の新年号から始まった連載「視点」。そのコンセプトを、佐佐木幸綱先生が編集後記でこう書いている。言い換えれば「それぞれの短歌論、短歌観を自由に書いてください」ということだろう。

「自由」だから、この一年余りの間に批評からエッセイ風までさまざまな筆者の「視点」が示されてきた。トップバッターとして打席に立った高山邦男は「日常詠への視点」と題し、日常から素材を見つけて歌にする日常詠が「無自覚な作歌動機の商品から脱却してゆこうという志向」を持つテーマ詠と比べ「惰性的で、平凡」という負のイメージがあることに疑問を呈する。「日常詠はテーマ詠に否定されているかのようである」状況への反証として高山が挙げるのは、日常に端を発した二人の歌人の

歌だ。同性愛者であることを公言している小佐野彈の「ママレモン香る朝焼け性別は柑橘類としておく いまは」や「どれほどの量の酸素に包まれて眠るふたりか 無垢な日本で」を、春日井建の「美学を純化するための演出」を凝らした「われよりも熱き血の子は許しがたく少年院を妬みて見をり」や「男囚のはげしき胸に抱かれて鳩はしたたる泥汗を吸ふ」と比較して「思いのほか日常的で落ち着いている」と指摘。佐藤モニカの「原動力はいくらかの怒りかもしれずカプチャーノマシンは朝の音たて」や「少しづつ子宮膨らみゆく秋の葡萄、桃、梨、林檎をかじる」も引用しつつ、小佐野や佐藤の歌が「日常から出発して詩の領域に届いている」と評価する。

さらに『私』が社会とか自然等の外界に接する最前線が「日常」なのだとして「日常を詩的テーマから、或いは詩的テーマを日常から見つめ直してみる視点があつていい」。「日常には現在の問題が潜んでいて、

詩的世界へつながる通路がある」と結論付ける。要するに日常詠というカテゴリーが問題なのではなく、歌が詩的世界を内に持つていかどうかの問題なのかということなのだ。高山の考えに私も賛同する。「こうでなければならぬ」という考え方は「おのがじし」の精神に反するだけでなく、歌を画一化させ、細らせるところからだ。

一方で、二月号の白岩裕子の「読むこと・詠むこと」には、湘南歌会で師と仰いだ石川一成の「具体的に像を結ぶ言葉を必ず一首の中に入れること」という教えが登場する。石川が例示したという自作の一首「幻のごとく二つの杭に見ゆ死を思ひたる日も水に杭ありき」には確かに「二つの杭」という像を結ぶ言葉があり、その詩的世界に読者を誘うガイドロープとなっている。能や茶道のように、まず型を身に着けるという意味で、石川の言葉は重要だ。しかし個人的には、型をしつかり身に着け、経